

藤並の森



▲松谷みよ子さんと「龍の子太郎・あや」の人形（黒姫童話館 展示室にて）

リレー随筆

松谷みよ子のひととなり

瀬川 たくみ せがわ

時々、母は女家康ではないかしら？と思うことがある。

母は若い作家らを集めて育ててきたのだが、その編集会議の時に、クツションやらぬいぐるみを抱えて、こくりこくりと寝始める。

他の作家たちは、構わず会議を進めるが、道が逸れたり、肝心なところに来ると、「それは違う」とか「こう決めてはどうかしら？」と「肝心」なことをズバリと言うらしい。

三年前に、こうして母が約四〇年育ててきた会が突如崩壊した。早朝に事務局全てが消えたのだ。

お家騒動に見せかけているが、そんな事ではないと思っている。というのも、背景に著作権の独占目的や壊す仕組みが見えてきたからだ。女家康は見抜けなかったのかとお叱りを受けるかもしれないが、あの家康だって同じ思いをしたかもしれない。日光東照宮の「見猿、聞か猿、言わ猿」は非常事態の警戒を意味すると知った時、同じ背景と苦悩を感じた。人の足を掬う人間に対しての警戒策。

母の仕事に携わるようになってから、初期の作品群に触れ、冷水を浴びるような驚きや目から鱗という気づきを与えられた。

母と私と妹の基本は笑いなのだ。何かにつけて、

物事を笑いに変える癖がある。母の初期の作品にはそれとは全く違った「視点」があった。鋭く激しいものだった。幼い頃に読んだ「赤い蠟燭と人魚」で衝撃を受けたような、同じものを母の作品に感じた。猫と戯れたり、花に水をやったりのどかな母とは全く別の人間が確かにそこにいられて、母ではなく作家・松谷みよ子のひととなりの広かつ奥深さに仰天した。

今回は、高知県立文学館で開催される。

母も私も土佐の血が入っている事を秘かに自慢している。世の為、人の為に頑張ったり、何でも笑いに変えたりするおおらかさ、土佐の土地柄や気風と似て、親近感がある。

今年が『龍の子太郎』が世に出て五十周年。実は、最近の若者達に私は時々太郎を見る。今の時代を生き抜く力強さと未来を感じる。

「松谷みよ子の世界展」で戦争を生き抜いた作家・松谷みよ子のひととなりを通し、未来ある若者達に生きる知恵や逞しさ、人ゆえの豊かさや悲劇の数々を絵本や物語の中から多く感じ取っていただければ嬉しく思う。

（「松谷みよ子の世界展」監修担当）

展覧会
紹介
EXHIBITION

松谷みよ子の世界展

平成22年
11月16日(火)
▼
平成23年
1月10日(月・祝)
常設展示室
特設コーナー
観覧料500円

松谷みよ子さんが描いてきた豊かな世界を、ゆかりの地・高知でお楽しみください。

親から子へと読み継がれる名作(モモちゃん
とアカネちゃん)シリーズや、出版五十周年を
迎えた『龍の子太郎』の作者である松谷みよ子
さん。今年の七月から出版されている最新刊
『妖怪ホテル』シリーズでは前書きでホテルの
支配人として登場しています。

◀ 民話探訪の様子(左から2人目が松谷さん)
(所蔵)松谷みよ子民話研究室



松谷さんは、一九二六(大正十五)年東京に
生まれましたが、母方の祖父が高知県土佐郡
地蔵村(現・土佐町)の出身であり、高知が父祖
の地というゆかりがあります。『自伝じょう
ちゃん』やエッセイの中でもたびたびそのこと
に触れられ、「私には土佐の血が流れているの
よ」とおっしゃっています。

松谷さんは、幼い頃から母親がそろえた日本
児童文庫や小学生全集を読んで育ち、戦争中に
“生きている証”のように童話を書き始めました。
長野県に疎開中に師・坪田譲治(児童文学作家)
と出会い、その力添えで一九五一(昭和二六)年
に処女出版された『貝になった子供』で第一回
児童文学者協会新人賞を受賞。これをきつつか
けに、童話などの児童幼年文学、民話の再話・
創作、現代民話への取り組み、小説、詩、エッ
セイなど多岐にわたるジャンルの作品を書き
続けてきました。

どのジャンルの作品でも、根底に流れている
のは師・坪田譲治から贈られた「文学の形式は

どんなものでもよろしい。ただ、人生を書き
なさい。」という言葉であり、手でさわるよう
な実感をもって物事を捉えて語り継ぎたい
という松谷さんの思いです。
本展では、これまで松谷さんが歩いてきた
人生とともに、素晴らしい物語が次々と生ま
れた軌跡を辿ります。

高知とのゆかり

高知とのゆかりについて紹介するコーナ
ーを設けます。高知にふれたエッセイなどの
引用パネルのほか、『お月さんもいろいろ』や
松谷みよ子・桂井和雄・市原麟一郎共著の
『土佐の伝説』など、高知にまつわる作品を
展示します。特に『土佐の伝説』の原稿の余
白には土佐弁の書き込みがたくさんあり、
必見の資料となっています。

子どもたちの ためのお話

『モモちゃん』と『アカネちゃん』シリーズ
や『オバケちゃん』シリーズ、『あかちゃん
の本』シリーズなどを中心に、豊かに成長
する子どもたちの姿を描き続けてきた児
童幼年文学における大きな功績を紹介し
ます。貴重な原稿や創作ノートのほか、
本の表紙を飾った愛らしい人形たちを展
示します。

民話・創作民話

『龍の子太郎』『まえがみ太郎』『ちびっこ
太郎』の『太郎三部作』など、これまで再話・
創作した民話の世界の奥深さと、民話に
込められた祖先の歴史を読み取る松谷さ
ん独自の視点を紐解きます。原稿、取材



▲『ちいさいモモちゃん』
松谷みよ子著 講談社刊

会 覧 展
 紹 介
 Exhibition

松谷みよ子の世界展

平成22年
 11月16日(火)

平成23年
 1月10日(月・祝)
 常設展示室
 特設コーナー
 観覧料500円

☆展示解説

展示会担当者による
 展示解説を行います。

毎週土曜日
 (1月8日を除く)と
 11月16日(火)、
 11月23日(火・祝)、
 1月9日(日)、
 1月10日(月・祝)

各日とも午後1時半～
 (約30分)
 参加には**当日観覧券**
 が必要です。

現代社会の中でも今まさに新たな民話
 が生まれています。そのような民話の種を
 全国から集めてまとめた『現代民話考』
 などの現代民話への取り組みを、関連資料
 の展示で紹介し、一人ひとりに語り部と
 なってほしいという松谷さんの思いを伝
 えます。

現代の民話



▲『龍の子太郎』初版本(所蔵/松谷みよ子民話
 研究室)

ノートの展示ほかの、民話探訪のようす
 を写真パネルで紹介します。

いのちのメッセージ

戦争や命にかかわる大切なメッセージ
 を伝える(直樹とゆう子の物語)や(絵本
 平和のために)シリーズ、詩集『とまり木
 をください』などの作品紹介とあわせて、
 印象的な表紙・挿絵の原画などを展示
 します。このほか、小説、エッセイ、最新刊
 などの展示、師・坪田譲治から受け継いだ
 雑誌「びわの実学校」「びわの実ノート」や
 松谷さんの自宅に開設されている文庫
 「本と人形の家」についての展示など多角
 的に紹介します。

松谷みよ子さんの文学は温かな眼差し
 と独自の世界観を持ち、女性であり母で
 ある松谷さんでなければ書けなかった
 物語ばかりです。その幅広い作品世界を
 心ゆくまでお楽しみいただける展示会で
 ですので、ぜひ、お見逃しのないようご覧
 ください。
 (学芸課/間城彩佳)

◆関連企画のご案内◆

■記念講演会「土佐とわたし」

松谷みよ子さんご本人による講演と、当館ミュージアムショップでの書籍購入者を
 対象としたサイン会(先着100名)です。
 ※サイン会の詳細についてはお問い合わせください。

日 時：平成22年11月28日(日) 午後2時～3時30分

※サイン会は3時30分～の予定

場 所：高知県立文学館1Fホール 定 員：100名

参 加：要**当日観覧券** 申 込：電話または文学館受付にて事前申込

■松谷みよ子の愛した“土佐民話”名作鑑賞のつどい

松谷さんとも交流がある土佐民話の第一人者・市原麟一郎さんと「高知県立文学館・語りと
 紙芝居の会」の会員による語りや紙芝居実演で、ゆかりのある土佐民話をご紹介します。

日 時：平成22年12月11日(土) 午後2時～3時30分

場 所：高知県立文学館1Fホール 参 加：**無料**

申 込：当日、会場へ直接お越しください

■朗読劇「龍の子太郎」～心に響く、太郎の物語～

心に響く壮大な太郎の物語を、プロの俳優・声優が演じる迫力ある朗読劇でお楽しみください。

日 時：平成23年1月8日(土) 開 場：午後1時半 開 演：午後2時～3時

場 所：高知市立追手前小学校体育館 出 演：「物語シアター」のみなさん

参 加：**500円**(大人こどもとも 専用の鑑賞チケットが必要です)

定 員：300名(全席自由席)

※文学館の本年度展示会をお一人様1回ご覧いただける招待券付。

※チケットは文学館受付などで平成22年11月6日(土)から販売します。

その他、朗読の会、クリスマスカード作りなどを催します。詳細は文学館までお問い合わせください。

吉井勇没後五〇年展 関連イベント アラカルト



▲伊藤一彦氏の講演会
後のサイン会も好評でした。

●短歌大会

「吉井勇没後五〇年 高知県短歌大会」が十月三日(日)開催されました。

会場には、約百名の参加者を得て、短歌大会運営委員会会長の楠瀬兵五郎氏と、歌人で若山牧水記念文学館館長の伊藤一彦氏の講評、表彰式の後、伊藤一彦氏の「旅と酒と歌と」牧水の場合・勇の場合」と題した講演が行われました。

一般の部には百六人から二百六首、中高校生の部には百七人から百七十三首が寄せられました。

一般の部 最優秀 吉井勇賞は、高知県佐川町和田由香さんの「娘ですよやさうですかと笑ふ母認知症でいいこの母でいい」伊藤一彦賞は、高知県香南市の窪田すず子さんの「木を変へて鳴きはじめてるひぐらしのこころの髪に触れしこちす」。学生の部では、最優秀賞に香北中二年の郷久保清佳さんの「なつがきたひまわり咲いた大きいよわたしをみるわたしもみてる」が選ばれました。また、選者特別賞を受賞した、同一年の有川文椰さんの「ぼくは今全国せいはい目標のソフト部一年おしぼり係り」が表彰



▲選者特別賞を受賞した有川文椰さんと楠瀬兵五郎氏

●文学散歩

される際には、会場から暖かい笑い声と一段と大きな励ましの拍手が贈られていました。

文学散歩「吉井勇と土佐路」が十月八日(金)と十月十七日(日)の二回開催されました。吉井勇の歌碑は、県内に代表的なものが十基、香美市香北町猪野々に地元の方々が建立した十五基があります。今回は、猪野々地区にある碑を訪ねました。

勇の誕生日である八日は生憎の雨でしたが、吉井勇記念館や同じ敷地内にある湊鬼荘を見学。全国、日本の滝百選に選ばれている「轟の滝」や勇が歌に詠んだ「御在所山」とその近辺の山々を包む露景色を堪能。また、昼食時には勇の愛した「瀧風」で乾杯。勇の百二十四回目の誕生日を祝いました。

●鼎談

「鼎談〜吉井勇を偲んで〜」が十月十日(日)開催されました。

メンバーは、今年九十一歳になられる妻鳥季男氏と、俳人であり土佐国分寺長老の林廣祐氏と担当学芸員の三名。

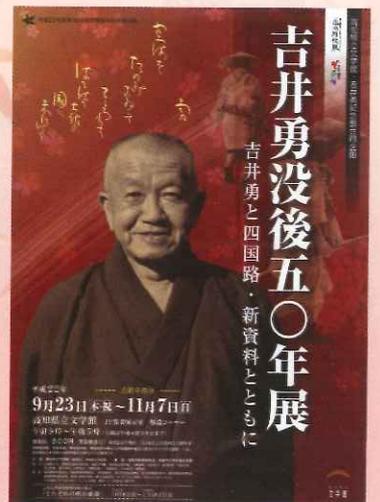
妻鳥氏は、愛媛県の高野山真言宗の寺院に生まれ、昭和十三年、愛媛の友人に見せられた吉井勇の短冊から、吉井勇に傾倒。昭和三十一年筆山の歌碑建立の際、京都の吉井勇宅を訪問以来、高知の歌碑建立に尽力。来高時には吉井勇にお供し、機会あることにお宅を訪問しています。その時手にいれた吉井勇の著書や手紙については、高知県立文学館にご寄贈くださっています。

会場では、吉井勇の懐かしい声や演劇で紹介されたコンドラの唄などとともに、吉井勇の思い出話に花が咲きました。九十歳を過ぎていとは思えない饒楽とした妻鳥氏が、一言一言噛みしめるように思い出を語ってくださった姿は、とても印象的でした。弘法大師に惹かれ、この地を訪ねた吉井勇。土佐を起点とした、西国の旅の動向は、新資料などを通して検証し、今回、展覧会を通じてご紹介しています。是非、展覧会もご覧ください。

(学芸課/津田加須子)



▲妻鳥季男氏(左)と、土佐国分寺長老の林廣祐氏



「吉井勇没後五〇年」展 図録 & 「短歌風土記」販売しています。

今回は、今戸益喜氏の書簡や大澤輝彦氏などの新資料のご紹介もしています。資料集としても図録としても価値ある一冊です。630円(税込み)。是非、お手に取ってご覧ください。また、「短歌風土記 一土佐」を妻鳥季男氏の監修のもと再発行しました。吉井勇は、土佐関連の歌を約千首詠んでいます。短歌風土記としては、大和編、山城編に続く、大変貴重な著書となっています。1,050円(税込み)

好評
です!!



日の光青くはてなく — 岡本彌太の詩碑 — 猪野 睦

岡本彌太の詩碑が岸本の脇の磯に建ったのは、戦後三年目の六月だった。それから六二年がたつ。白い牡丹の花を 捧げるもの
剣を差して急ぐもの
日の光青くはてなく
このみちを たれもかへらぬ

この詩「白牡丹図」は岩手県の山小屋に住んでいた高村光太郎に揮毫してもらった。それを高知の石工が刻んだ。三尺五寸、四尺六寸というから幅一メートル、高さ一メートル半の四角面の碑だった。当時の高知の文化関係者が小冊子の「岡本彌太選集」をつくり、講演会を開き資金を集めた。多くの岡本彌太を慕う人たちの熱のこもった碑だった。

◀ 岡本彌太の白牡丹図の碑



この碑は高知市から大八車で若い詩人たちによつて、一日がかりで運ばれた。トラックも不足時代で、高知市から電車通りに沿い後免まで、あと野市、赤岡の砂利の県道を岸本までひいた。設置は脇の磯の太平洋の見えるところだった。当時は今と違ってパイパスも、それに沿つた高架鉄道も、海をさえぎる防潮堤もなく、いかにも岸生まれの彌太碑にふさわしい場所だった。やがてパイパス工事ですの場にあつた碑は月見山の麓のお宮の広場の隅の現在地へ移転された。岡本彌太は神戸の鈴木商店につとめたりするが帰郷、夜須小学校代用教員をふりだしに、太平洋戦争開始翌年の十二月、四四歳で病没するまで香美郡内の教員生活を続けた。

この間、「ゴルゴダ」「麗詩仙」「青騎兵」「鸞」などの県内同人誌をおこし、また「詩神」「鷺」などにかく詩で、高知の現代詩のコースを開いた。一九三二年詩集「瀧」をだし、「南海の宮沢賢治」「青き霞の高土」「東洋的愛情深い作品」などと評された。このあと「日本詩壇」に時代を洞察する作品をかきつぐが第二詩集「山河」は未刊に終わった。戦後二〇年ほどたつて高知県文教協会から「岡本彌太詩集」がで、このあと泰樹社から「岡本彌太詩集・瀧篇・山河篇」の二冊がで、岡本彌太の全体像が見えるようになった。それまで没後半世紀かかった。

先日、碑の前にたつと、日の光 青くはてなく、
が伝わってきた。そして、世の中、なんちゃあ、
あぜることないぜよ、という彌太の声が聞こえてくる気がした。
(詩人)

資料受贈報告

— 最近の寄贈資料から —
レクイエム
『鎮魂詩四〇四人集』

鈴木比佐雄・菊田守・
長津功三良・山本十四尾編
コールサク社 A5判
二〇一〇年八月 六三五頁



本書『鎮魂詩四〇四人集』は、十九世紀以降の戦争で亡くなった人々をはじめ、多くの死者たちを鎮魂する詩篇を集めた詩選集。万葉集の代表的歌人、柿本人麻呂が妻に捧げた挽歌に始まり、宮沢賢治「永訣の朝」、金子みすゞ「大漁」など、今は亡き詩人の著名な作品のほか、現在日本の各地で創作に励む詩人たちの作品が、数多く収録されています。

作品総数四九六篇、六〇〇頁を超えるこの大著には、高知県出身の詩人の作品も収められ、本書を寄贈して下さった小松弘愛さんの詩「養分」も第十七章「家族 子ども・兄弟・祖父母 親族」の一篇として掲載されています。

小松弘愛さんは一九六七年、三三歳の時に詩作を始め、一九八一年に詩集『狂泉物語』で第三二回

受贈報告(平成二二年八月〜十月) 敬称略

- ▼橋田憲明・「ホトトギスの俳人1001 稲畑汀子編 新書館刊」
- ▼小松弘愛・『鎮魂詩四〇四人集 鈴木比佐雄他編 コールサク社刊』他
- ▼高知県教育委員会・「(紙芝居)よふかしおにとはやねちゃん やなせたかし 作・絵 高知県モラロジ青年クラブ連合会刊」
- ▼土佐史談会・龍馬学十講座 龍馬のすべて — 土佐史談会編刊
- ▼講談社・「たつこたろう 松谷みよ子文 朝倉 撰絵 講談社刊」
- ▼林 嗣夫・「風が木の名を呼んでいる 林 嗣夫著刊」
- ▼井久保伊登子・「(詩集) 落葉木 井久保伊登子著 編集工房ノア刊」
- ▼横江夕起・「石川啄木『一握の砂』出版一〇〇周年記念作品集 風紋 美研 インターナショナル編刊」
- ▼他 横田晴光・「でこぼこの名目 安岡章太郎著 世界文化社刊」
- ▼他 大原 誠・「元禄太平記 南條範夫著 日本放送出版協会刊」
- ▼他 植野雅枝・「ノール賞文学全集 主婦の友社刊」
- ▼他 高知ボランティアビューロー・「名著復刻 日本児童文学館 ほるぷ出版刊 他 一〇五点」

日氏賞一九九六年には「どこか偽者めいた」で第二九回日本詩人クラブ賞を受賞。現在、詩誌「兆」の同人として創作活動を続ける一方、高知新聞朝刊で毎週日曜日に掲載されている「高新文芸・詩壇」の選者も務めておられます。

当館には、前述の「兆」をはじめ、毎月たたくさんの同人誌・郷土雑誌をお寄せいただいています。その資料群は、数ある収蔵資料の中でも一際ユニークな存在であり、特色ある一群を形成しています。当館では、その保存に努めるとともに、館内に「同人誌閲覧コーナー」を設け、三十余の多彩な文芸誌を配架しています。ご来館の際は、ぜひ手にとつてご覧ください。
(学芸課/小松路代)

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

多彩な活動で好評です！

文学館の朗読活動



朗読の会

高知県立文学館カルチャーサポーターの活動の一つとして、文学作品を耳で聞くことにより文学作品の楽しさ、奥深さに触れていただくため、毎月一回第三土曜日に、朗読の会を開催しています。朗読者は、長年朗読を勉強し、経験を積まれてきた方々で、様々なテーマにより文学作品をご紹介します。

また、文学館内での朗読の会のみではなく、文学館外に出て出張朗読の会という形で朗読を行う機会もあり、依頼に応じて外部でも随時活動しています。

多彩なテーマでお聞きいただく朗読の会、まだ参加されたことのない方はぜひ、ご興味のある月に参加されてみてはいかがでしょうか。また、出張朗読の会につきましても、文学館までお問い合わせください。

(学芸課/野々村昭美)

朗読の会 下半期のテーマ

- 11月…時代小説
- 12月…松谷みよ子展関連作品
- 1月…樋口一葉
- 3月…収蔵資料展関連作品

※2月は朗読フェスティバル開催

朗読フェスティバル

高知県立文学館では毎年、県内の朗読活動を盛り上げ、より文学に親しんでいただくことを目的として、また、参加者も観客も全員が楽しめるイベントとして朗読フェスティバルを開催しています。好評をいただき、今年度で四回目となる本イベントには、毎年、様々な方が参加され、朗読作品も、純文学作品から自作のものまで多岐に及び、それぞれに違った持ち味を活かした朗読で作品世界の魅力を伝えてくれます。

朗読フェスティバルへの参加については、県内で朗読活動を行っている方であれば、個人・団体等はいりませんので、興味のある方は文学館までお問い合わせください。今年は、文学館での朗読に挑戦してみませんか。ご応募お待ちしております。

(学芸課/野々村昭美)

朗読フェスティバル

2011

平成23年

2月19日(土)開催

出演者募集中!

●出演申込のしめきり●

11月30日(火)

募集要項に必要事項をご記入の上、文学館まで応募してください。

トピックス

●宮尾登美子さん、親鸞賞を受賞!

二〇一〇年十月十五日、作家の宮尾登美子さんが親鸞賞を受賞されました。

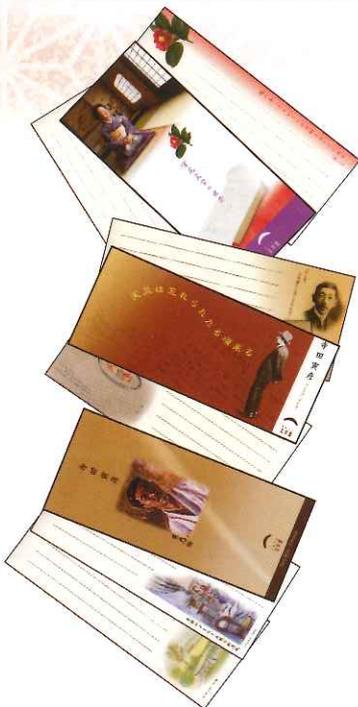
この賞は、日本の文化及び文学の振興、発展を目的として、二〇〇〇年に財団法人本願寺維持財団が創設した文学賞で、対象は、優秀な文学で、ジャンルは、限定されていません。受賞者は、一年おきに偶数年の十月に発表され、六回目となる今年は、宮尾登美子さんの小説「錦」に贈られました。

「錦」は、西陣織の復元に力を尽くされた人間国宝龍村平蔵さんがモデルになっており、宮尾さんが三十年間温められ、執筆された作品です。

●高知県立文学館オリジナル一筆箋が出来ました!

文学館では、寺田寅彦と宮尾登美子オリジナル一筆箋を販売いたします。みなさまからの素敵なメッセージを、文学館オリジナル一筆箋でお届けください!

値段は、三百円(税込み)です。(学芸課/津田加須子)



朗読コンクール



今年も、朗読コンクール県審査の季節がやってきました。八月に、県内を東部・中央・西部の三ブロックに分けて地区審査が行われました。今年は、これまで減少傾向にあった西部と東部の参加者が増加し、小学生八十六名、中学生二十七名のあわせて百十三名が個性豊かな朗読を披露してくれました。今年で十三回目になりますが、県全域を対象とした朗読のコンクールは、全国的にも高知県だけのようです。

県審査は十一月二十一日(日)午後一時から、場所は高知県立文学館一階ホールで行います。地区審査を通過した二十二名の、熱気あふれる朗読をお聞きいただければと思います。また、午後二時半からは、へしばわんこの和のころシリーズで有名な絵本作家、川浦良枝先生が、「本から広がる世界」と題して講演していただきます。記念講演会の前には表彰式、さらにその後、川浦先生の本を購入された方を対象としたサイン会があります。

入場は無料です。みなさまお誘い合わせの上、ぜひ、いらして下さい！

(学芸課/永橋禎子)

高知県立文学館 第13回児童生徒文学作品朗読コンクール

朗読審査 & 記念講演会

入場無料 一般公開

会場：文学館ホール

日時：平成22年 11月21日(日) 13時～

- ・審査(公開)：13時～14時20分
- ・記念講演会：14時30分～15時30分
- ・表彰式および講評：15時40分～16時



サイン会開催!!

コンクール終了後、会場にて川浦先生の本を購入された方を対象にサイン会を行います。(先着80名様まで)

ミュージアムショップより

「しばわんこ」は、日本家庭で「みけにゃんこ」と共に暮らす柴犬です。NHK教育テレビなどでアニメ化もされ人気シリーズとなっています。

川浦先生の記念講演会にあわせて、十一月三日より来年一月十日まで、当館ミュージアムショップにて可愛いしばわんこグッズを販売します。

法被姿もかわいいうみや、マスクットなど見れば思わず癒されるグッズやレターセットが和みの世界へ誘います。季節柄もあり、おすすめは、二〇二一年カレンダー(税込一〇五〇円)です。

しばわんこと一緒に季節の移り変わりを楽しみませんか？また、絵柄は裏面の点線にそって切るポストカードとしてもご使用いただけます。卓上にも置けるスタンド台紙付きです。ぜひ、足をお運び下さい。

ミュージアムショップでお買い物だけのお客さまも大歓迎です。(入館料は必要ありません)

(事業課/岡崎由美子)



▲「しばわんこの和のころ 2011年カレンダー」
発売元：(株)エンスカイ

館長室から

「文化人たちが愛した鎌倉」

元吉 喜志男

学生時代、大内兵衛先生の著書『経済学五十年』との出会いをきっかけに、随想をはじめ先生の書かれたものを読み漁りました。文章から滲み出る学殖の深さ、温かい人間性、学問に向かう高潔な姿勢、知的清潔さなどは若い心に快い刺激を与えてくれました。

経済学者としての先生の業績は言うまでもありませんが、「大学の道は明德を明らかにするにあり」「理と情」「人生学ぶに如かず」等々の言葉は、人生の歩みの中で、ふと襟を正させてくれます。自宅の書棚にある『大内兵衛著作集(岩波書店)全十二巻など先生の著書は今でも座右の書となっています。

その大内先生が法政大学の総長を引退後、晩年の永住の地として選ばれたのが鎌倉の姥ヶ谷です。著作集・第九巻の月報9に堀利貞氏の「姥ヶ谷の大内さん」という文章があります。「姥ヶ谷は稲村ヶ崎と七里ヶ浜の中間にある小さな谷戸で、新田義貞の鎌倉攻めるとき、作戦上この姥ヶ谷に兵士を隠しておいたというので、武者隠ヶ谷とも呼ばれたそうだが、現在になってからも僅か数十戸の小さな谷に、大内さんのほかに偉いサムライたちがあちこちに隠れていた。太平洋戦争の末期には哲学の三木清、西田幾多郎。もつと前には現在の大内邸の東隣に『オリンポスの果実』の作家、田中英光が少年時代住んでいた。」と記されています。

先日、鎌倉を訪れる機会がありました。戦前戦後を通じて文学を志す多くのサムライたちをも誘った文化都市鎌倉。「鎌倉文士」「鎌倉文庫」「鎌倉ペンクラブ」等々の言葉とともに、この文化的風土の魅力の周辺とそこに息づく人達の活動に、改めて興味を惹かれている今日この頃です。

平成23年1月10日(月)まで、高知県立文学館と土佐山内家宝物資料館による**連携展示**となります。

※年末年始のため、12月27日(月)～1月1日(土)は休館いたします。

新年は**1月2日(日)**より開館いたします。

※また、常設展示室の入替のため、1月11日(火)～1月31日(月)は**臨時休館**とさせていただきます。

企画展
案内

吉井勇没後五〇年展 ～吉井勇と四国路・新資料とともに～

9月23日(木・祝)～11月7日(日) (※会期中 休館日なし・入館は午後4時半まで)

会場：高知県立文学館2F 常設展示室特設コーナー

観覧料：500円(常設展含) 開館時間：午前9時～午後5時



吉井勇展の紹介をしています！ 詳細は4ページをご覧ください。

松谷みよ子の世界展

11月16日(火)～平成23年1月10日(月・祝)

※会期中、12月27日(月)～1月1日(土)は年末年始のため休館となります。

会場：高知県立文学館2F 常設展示室特設コーナー

観覧料：500円(常設展含) 開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

これまで松谷さんが歩いてきた人生とともに、幅広い作品世界を原稿、創作ノートなど貴重な資料でご紹介し、素晴らしい物語が次々と生まれた軌跡を辿ります。



松谷みよ子の世界展の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

朗読フェスティバル 2011

出演者募集中！

高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しんでいただくよう、平成23年2月19日(土)に「朗読フェスティバル2011」を開催いたします。「朗読フェスティバル2011」に朗読者として出演してみませんか？

●出演申込のしめきり●

11月30日(火)

募集要項に必要事項をご記入の上、文学館まで応募してください。

大人気の土佐弁で遊ぼう！

土佐弁かるた大会

有限会社生活創造工房さんと文学館が新春に贈る、巷で大人気の「土佐弁かるた」(生活創造工房)を使ったかるた大会です！

日時 平成23年1/9(日) 午後2時～

高知県立文学館1F
こどものぶんがく室にて開催！
(参加無料・申し込み不要)

遊びにきてね！

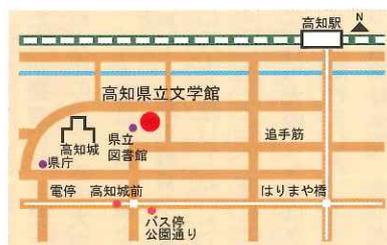


朗読すること
それは、目で、耳で、声で
文学を楽しむということ。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
駐車場 無し。
附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス(朝倉(高知大学前)行)「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857

E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/